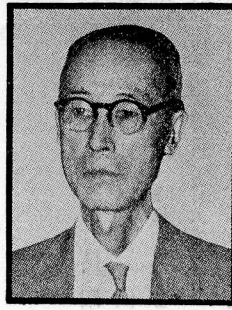


洛友会会報

京都市左京区吉田本町
京都大学工学部
電気工学科教室内
洛友会

岡本 赴先生を偲ぶ

京都大学教授
昭和9年卒 林 千博



が、三十余年の長きに亘り、教育と研究指導を通じて数多くの人材を育成され、また電気学会副会長を勤められるなど、わが国の電気工学界に多くの貢献をされました。

本学名誉教授岡本赴先生は、昨年十月十一日御齡八十六歳をもち、ついに永眠されました。謹んで哀悼の意を捧げ、ここに先生の御生前の面影を追想したいと存じます。

先生は、明治二十一年六月十日岡山市でお生れになり、津中学校、第一高等学校を経て、大正四年七月京都帝国大学工科大学電気工学科を御卒業になりました。御卒業後の御略歴は後記の通りでございます。

先生の最も顕著な御業績は、電力応用の一分野である電気溶接に関するものであります。大学の助教授に就任されて間もなく、当時「鋳かけ」として殆ど顧みられなかった電気溶接の重要性に着眼され、御専門の電気機器の立場から、他に率先してその研究に着手されました。これは、我が国における溶接の理論的・組織的研究の嚆矢であります。その後、元工部中央実験所（現在工学総合センタ）内に溶接研究室を創設され、多くの困難を克服して、設備の充実と研究の促進に努められ、多大の先駆的成果を挙げられました。また、溶接協会（現在の溶接

学会）の創設に尽瘁され、自らも長期に亘ってその会長をお勤めになりました。溶接工学・溶接技術の今日の発展は先生の御尽力に負うところ極めて大きなものがあります。

以上のように、電気工学界、溶接工学界に尽くされた先生の輝かしい御功績により、昭和二十一年六月には第一回溶接学会賞を受けられ、同時に溶接学会名誉員になられ、また昭和三十九年五月には電気学会名誉員に推挙されました。

先生は昭和二十三年八月満六十歳をもって停年退官になりました。因に停年が満六十三歳となったのはその翌年からであります。昭和二十三年は電気工学科の五十周年にも当り、その五十周年および御退官記念行事の記事は電気評論昭和二十四年八、九月号に掲載されています。

その後、昭和二十五年八月、要望されて兵庫県立中央工業試験所所長に御就任、県内各地に分散していた試験機関を集中した中央工業試験所を創設され、その設備内容を画的に充実して地域産業の発展に尽くされました。昭和二十八年四月には、新制大学として発足間もない兵庫県立姫路工業大学学長に御就任になり、昭和三十三年八月御退職になるまで、高邁な

御識見と豊富な御経験を生かして、人材の充実と設備の拡充に尽瘁され、同大学の基礎を確立し、その発展に大きく寄与されました。しかし、これら所長、学長の時代には、随分御苦労もあつたように洩れ承りました。

先生は、稀に見る明晰な御頭脳と抜群の記憶力の持主であらせられたことは、その円満な御人格とともに広く人の知るところであり、先生に接する人々の敬服して止まないところでありました。先生の要を得た御講義は黒板に書かれた流麗な文字とともに、お教えを受けた私達の終生忘れ得ないところでありました。

先生は、若い時は病弱であつたと御自身で言っておられました。が、その後は瘦弱ながら御健康で、暇を見ては寺町通りなどを散策され、古書を漁られたり、また神戸や姫路からお帰りになる途中、時々梅田で洋画を御覧になったりされました。御専門の分野以外に、書道・美術・茶の湯・園芸・囲碁などの広い範囲に亘る風雅な御趣味をお持ちでした。姫路工業大学御退職後も、大阪変圧器株式会社監査役をされていましたが、その余暇にはこれらの御趣味をお楽しみにしておられました。しかし、約四年前に健康を損われ、その後療養されていましたが、薬

活効なく遂に御世界されました。先生の御法名は、徳寿院清誓超学居士と申し上げ、御墓所は上品蓮台寺（京都市北区紫野十二坊町）にあります。

先生の偉大な御業績と豊かなお人柄を偲びつつ、心から御冥福をお祈り申し上げます。

岡本先生の御略歴

- 明治21年6月 岡山市に生まれる
- 大正4年7月 京都帝国大学工科大学電気工学科卒業
- 4年7月 京都帝国大学理工科大学講師
- 7年8月 京都帝国大学工科大学助教授
- 11年2月 交流機器研究のため、ドイツ、イギリス、フランス、スエーデン、アメリカ合衆国留学
- 13年6月 リカ合衆国留学
- 13年7月 京都帝国大学教授
- 昭和2年11月 工学博士
- 7年10月 溶接協会（現溶接学会）会長
- 13年7月 学会員
- 12年5月 京都帝国大学評議員
- 15年5月 大阪変圧器株式会社顧問
- 17年8月 勲二等に叙し瑞宝章を授けられる
- 18年2月 京都帝国大学評議員

- 18年4月 學術研究会議會員
- 20年11日 從三位に叙せられる
- 20年10月 從三位に叙せられる
- 20年11月 電気学会副会長
- 21年11月 溶接学会第一回学会賞を受ける
- 21年6月 溶接学会名譽員
- 23年8月 京都帝国大学停年退官
- 23年12月 京都帝国大学名譽

山本三郎君のみ霊に捧ぐ

洛友会十四日会員一同

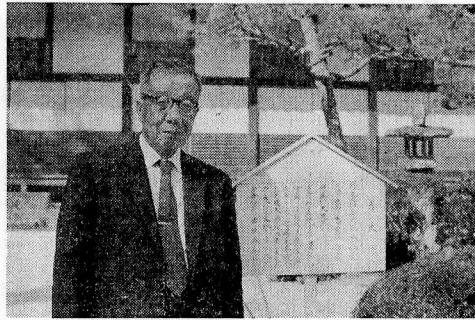
大正十五年卒山本三郎君は、昭和五十年一月三日腦出血にて倒れ、一月九日午後一時七十三才を前にして溘焉として昇天された。友人の面倒見がよく、洛友会でも本部役員、東京支部長、鶴友会幹事、十四日会幹事など、小まめに温かく多勢の世話をやいてくれた山本君のこの突然の訃報には、君を愛する友人のすべてが、信じ難い驚きと限りない哀惜の感に打たれたのであった。

君は京都上加茂の社家（神主の家）に生れ、京都一中・三高・京大電気とストリートに最短距離を進んで社会人となり、卒業時の不

- 24年3月 日本溶接協会顧問
- 25年8月 兵庫県立中央工業試験所所長
- 31年1月 試験所所長
- 28年4月 兵庫県立姫路工業大学学長
- 33年8月 電気学会名譽員
- 39年5月 旭日重光堂を授けられる
- 41年11月 大阪変圧器株式会社
- 41年6月 社監査役
- 47年6月 逝去
- 49年10月 逝去

況期にも災いされず、東信電氣に入社。高瀬川（水力）発電所を皮切りに、小諸発電所に移って結婚し、更に島河原発電所をまかされて独力で設計から建設・運転まですべてを手がけて、思い出にみちた処女作を完成された。その後阿賀野川発電所を最後に、昭和入編に移り合併で呉羽紡績となり、更に戦後の経営多角化で呉羽化学の創設に参画し、その専務として特に技術面で幾多の実績を残された。この半世紀近い実業人生活で、世のため人のために尽した功績が大なるのゆえをもって、天皇陛下はこれを嘉されて、宮中に夫妻を

召して、勲章を賜った。君は天性明朗でユーモアに富み、スポーツマン特有の温情に充ちた表裏のない性格は、触れる人すべてを魅了し信頼を受けて、誠に数多くの良友に恵まれていた。君自身晩年にこの多面的な友人の、各種の会合に出るのが何より楽しみだと、いつも夫人にもらしておられた由である。



君はまた終生無欲で仕事熱心、責任感の強い男だった。それが若き日には山中の発電にこもったまま、女性にまで無欲だったので、山本君の母堂が心配して、自ら無双の美人を選んでこの少女と結婚せよと、天下りに命令されたのだそうだ。しかし結婚したら責任感が強いので、この女性即ち千代子夫人を大切に守って爾来五十年、

誠によい良人であられた。そして三人の令息をもうけられ、長男は日立、次男は出光、三男は呉羽系の錦商事と、夫々立派に大成して、沢山のお孫さんにも恵まれて、晩年は実に平和で多幸な家庭生活を満喫しておられた。

葬儀の日ご出棺の折、ご長男の菊雄君がされた挨拶の中で「父はこの正月二日に、自分はやりたいことはすべてやったし、家庭は幸福だし、何一つ思い残すことはない。満足し切っているのです、もう何時あの世に召されても本望だと申しました。」といわれた言葉が、いつまでも印象に残っている。この偶言が箴をなして、翌日の三日に親戚一同が集った和氣飄々の団樂の席上で、君は倒れられたのである。直ちにこの悲報は十四日会員の間に伝えられたが、しばらくは面会謝絶とのことで、早く見舞にいけるようによくなくてと祈っていた数日の間に、卒然として幽明を異にしてしまわれたのであった。

思えば、君は古きよき時代に生を享け、華やかな生涯を送り、よき友と楽しみ、よき家庭に恵まれ、自から述懐されたように、幸福な人生の見本のような一生を、死の恐怖と対決することもなく、閉じられたのであった。

往事湘茫としてすべて夢に似たり
旧友零落して半ば泉に帰す
長夜君先づ去る残年我幾何ぞ
寒風懐にみつ涙泉下に故人多し

というのがある。君と時を同じくして十四日会の同輩は、それぞれの感慨において、自らの残年というか余命に対して、老計すなわち老後の生計と、そして死計すなわち死への身の整理と心構えとを、そこはかとなく考えているのである。そんな連中を尻目にかけて、あの人なつっこい笑顔で「わしゃもう失敬するデ」と明るく逝ってしまった君の終焉が、羨しくも朗らかに仰ぎ見られるのである。

君の在りし日の思い出の写真をここに掲げて、十四日会の会員一同は夫妻こそぞって「サブヤン、すぐあとから行くデ」と手を振って、しばしの惜別の情を捧げるものである。

註・十四日会とは、大正十四年と十五年の洛友会員が、過去十数年毎年欠かさず、夫妻揃って（総勢五・六十人）日本全土に互る二泊三日位の旅行を繰り返して、強く結ばれている、家族ぐるみの深交のクラス会である。

(石川辰雄記)

随 想

大正3年卒
元日発理事 高柳与四郎



が入社しました。

私共は大正四年村上さん夫妻の御媒酌で結婚したので、本年で六十年になりますが、一度の見合もしないで結婚式の二日前に東京から両親に伴われて小倉駅に下車したお嫁さんに初対面の挨拶を交した次第です。

私の趣味としては謡曲以外には何もありません。最初は大正五年頃広瀬さんのお世話で地方の先生につきましたが、昭和五年東京の梅若流の舟橋先生が久留米に稽古に来ておられることを聞き、交渉の結果小倉にも月に一度来て頂くことになり、漸く本職の先生に頂くことになりました。家内も子供

の時から父が宝生流の謡を稽古していたので聞いていた関係上、共に稽古を始めました。会員は十数人でしたが、会の名前を緑葉会とつけ、私が幹事としてお世話してました。その当時梅若流の独立問題が起こりましたが、囃子方が反対したので、能楽界では正式に認められません。門司の能楽堂での催には名人といわれた先代の梅若万三郎先代の梅若六郎兄弟と義弟に当る観世鉄之丞三師が揃って出演されましたが、残念なことに

囃子方は二流で我慢しなければならず、充分な演出が出来なかったのではないかと思います。梅若の独立問題は大東亜戦争の時、軍部の圧力で独立を勝ち取りましたが、戦後遂に各流の宗家と楽師連合との反対に屈し、梅若流は観世流に合流することになり、今日に及んでおります。しかし、今日の梅若六郎はその実力を買われ、毎年の当地の朝日能では五流の出演者に加わり、必ず参加して六人で演能しています。

私の謡曲の稽古は昭和十四年の日本発送電の創立まで続いたが、

新 春 雑 感

京都大学名誉教授・工博
大正6年卒 松田長三郎

日發に移ってからは全国に転動した転動で稽古の機会がなかった。家内は何とかして稽古を続けた今日に至っている。最高潮に達したのは梅若六郎に翁を指導して頂き、住吉の舞台で六郎、舟橋、鷹尾三先生を相手に翁のお披(ひらき)を堂々と演じた時だった。今日でも奥様方を相手に指導に当たっている。私は録木と景清の独吟が出来る位で、他は殆ど謡ったこともない。ただ今日でも土曜の朝と夕方、及び日曜日の朝の謡曲の放送は必ず聴いて楽しみにしています。

昭和50年、まず明けましてお目出とう御座います。会員各位の御健康と御活躍をお祈り申し上げます。歴代天皇の中で最も長い御在位は、実に波瀾の多い御代であったとは申せ、誠にお目出度いことである。京都の東寺では、毎年一月七日から一週間、御修法(ミシホ)といって、勅使参向のもとに、一山の管長や高僧によって、国家の安泰・聖寿万歳祈願の厳かな儀式が行われている。私は洛南の京都府立二中への往き還りには、五年間、いつもこの境内を通ったの

で、この御修法の時には、やはりそういうことをお祈りした。この頃の青年層のなかには、国を愛するということ、「愛国」の言葉も何だかピンとこないような傾向があるが、しかし一方、心ある青年には意気旺んな人達も多いので、聊か人意を強くする次第です。

我が国の国体や天皇制の存続すらも危ぶまれた一時期があり、また様々な日本の処置や、在り方についての内外の突飛な議論や意見などもあったが、幸いに戦後三十年にして、これだけの経済大国に成長して来たことは、一途に追いつけ、追い越せと、国の総力を挙げた成果であって、国民の偉大な力を想わずにはられない。歴史をひもとくと、歴代の天皇でも随分御苦労をなさった方々もおられるが、いづれも国内的のことであって、世界の舞台で、国の興亡の瀬戸際に立ったのは(日清・日露の両役はあるが)、これが初めてあり、実に累卵の危さであった。ドイツ、朝鮮半島、東南アジア等の現状を想うと、日本は幸福であったとつくづく思うのである。

外国の元首として、昨年は現職の米国のフォード大統領の来訪があった。時、偶々内外の情勢が悪く、折角の訪日も、国家・国民的大歓迎とまで行かず、大変残念であった。今年はこの五月に、英国のエリザベス女王が来訪される。明治三十五年であったか、私の小学生時代、日英同盟が成立した時は、大変な喜びようであった。子供心にも、日本が急に偉くなったように思った。実際、世界地図を拡げても、実に小さな東洋の島帝國が、地図の上では我国と同様の

小さな島、帝王国ではあるが、世界中に日の没することのない広汎な領土を領して、七ツの海に君臨している、富強を誇る英国と兄弟同志になったのだと、先生から告げられてみんなが大変嬉しがったことを覚えていて。兎に角、お目出度いことである。

今年はいろいろの意味において厳しい年である。一昨年末の石油ショック以来、世界的の不況は深刻である。あれほど繁栄を誇った米国でも、今は昔日の影は少し薄らいで、七〇〇万といわれる失業者を抱えて深刻な不況にあえぎ、自動車の街といわれるデトロイトは、失業者が街に溢れていると大げさに伝えられ、私が実際見聞した一九三〇年代の不況を凌ぐときえいわれている。英・仏・西独・伊、皆然りで、世の榮枯盛衰を眼のあたり見せられる想いで、明治の人間には感慨一入である。我国もまた、未だ嘗て経験したことはないような性質の不況に見舞われていて、大会社も一時停休、賃金カットなど、政財界首脳者たちの年頭所感に聞いても、その一端が窺われるが、こういう難局に処しても、我国は幾たびか厳しい困難な試練を乗り越えて鍛えられて来たのであるから、十分やって行ける力量があると信じる。いつか記

したことであるが、米国のハーマン・カーンは、数年前「二十一世紀は日本の世紀である」といつたし、最近英国のエコノミスト誌は「一九七五年から日本人の世紀であり、既に始まっている」とのことであるが、欧米の識者による斯かる見解は、第三者の日本人に対する率直な評価と、素直に受けとめて、驕ることなく謙虚に、これからは世界人として、自ら卑下することなく、堂々と活歩して行きたいものである。私が初めて欧州へ行ったのは昭和六年であるが、当時の欧米人の日本及び日本人に対するイメージと、現在の夫れとを考へ合せると、その甚しい変り方は驚く許りである。兎に角、徳川三〇〇年の鎖国時代を經、明治以来百年にして、これだけの發展を遂げて来たことは、世界歴史の上でも異例のことである。しかしこの發展は、何も我国だけのことではない。衰亡した国もある替りに、また勃興した国もある。現在世界の大国と考えられている米・ソ・中国にしても、米国は兎も角、ソ連は私が同国を見学したのは昭和七年、第一次五カ年計画の終りであったが、ドニエプル発電所の九万馬力、九基、計八十一万馬力のタービンの据付中(外国製で、

その他の科学、技術、工学もまた芽を出していない。これからという時であったが、質は兎も角、大量の技術者を養成し、専門家は極めて優遇されていた。それまで、米・独・英などから招聘していた技術者は、自国で一応建設の自信がなかったので、解任していたような時期であった。それ以来、ソ連の科学・技術の發達進歩には目覚ましいものがある。ああいう国情であるから、非能率的な国民の一部生活態度も報せられてはいるが、また一般民需などを犠牲にしても、国家の要請に依って重点的に、科学・技術の研究に打ち込んでいる学者も多く、その報告は注目されているし、人工衛星や核兵器などでは、流石の米国も脅威を感ずるほどであるという。最近報道された米国のサターン・ロケットの38トンの燃えがらは、地球のどこに落ちて来るか判らぬとは甚だ無責任で、ソ連のように回収すべきであると、ドイツの学者はいつていた(両国とも宇宙ドッキングに成功していることは、素晴しいことである)。国家がそのつもりになり、国民がその国策に共鳴すれば、僅々四十年の歳月でもこれだけの成果があるのである。中国でも同様に、久しく「眠れる獅子」といわれたが、今やそのほう大、豊富な土地、資源、八億に余る人口を以て大いに立ち上りつつある。大慶油田を初め、これか

ら調査が進むにつれて発見・開発せられる地下資源の宝庫は大きな期待を寄せられている。

先進諸国は軒並みにインフレと物価騰貴で、世界的不況の波に曝されているが、独り石油産出国はドルが集まって、わが世の春を謳歌しているようであるが、この繁栄はいつまで続くであろうか。いつかはこの反動で、痛い目を見ないとも限らぬ。ニューヨークの繁華街に航空界世界一を誇るパンアメリカン・ビルがあるが、そのビル内に親しくしている一米人の会社があるが、今年はどういうものか、クリスマス・カードは来なかつた。ヨットで地中海を遊航したほどの余裕のあつた人であるが、その近況を案じているのであるが、その本元のパンアメリカンやロッキードやまたドイツのダイムラー・ベンツなども、クエートあたりの石油資本に買収されるといふ噂さがあるほどで、お互いに安閑とはしておられない世智辛い物騒な世の中になって来たものである。

も学校も学生も父兄も、また社会も真剣に考えねばならぬことであるが、スグにストにもって行く風潮は困ったことである。過日の豪雪で、北陸への国道8号線が数日間不通になり、車に閉じ込められた人々は、一個五〇〇円の握り飯を買わされたという。大都市で大規模な交通ストが起つたらどうなるか、膚に粟を生ずる思いがする。日本沈没などと、小説や映画で見ている間は良いが、ヘタをずるととんでもないことになり兼ねない。最近、松下幸之助さんは、教育亡国をいつておられるが、義務教育を改革充実し、高等教育殊に大学教育は半減せよと極言しておられるが、一部の或は大部分かも知れないが、勉強したくない者がムードでワンサと大学に進学して、碌に勉強もしないでマージャンをやり、ゲバ棒を揮うことを諷刺しておられる。鳥養先生によると、敗戦当時、占領軍の教育当局者の意向としては、国立大学は従来の帝国大学を含めて、全国で僅かに十校ということであつたらしいが、いろいろの策動のため、結局心ならずも、所謂駅弁大学といわれるぐらい、多数の大学が誕生して、今では短大を含めて約九〇〇、学生数約二〇〇万という。文運益々盛んなりというべきか。真に学問が好きで、大いに勉学に

今方々の大学で授業料値上げに反対して、ストや授業放棄をやる大学の種になつて来ている。昭和四十四年以來の大学紛争は、未だに跡を断たない状態である。これは政府

真に学問が好きで、大いに勉学に

勵む学生であれば多々益々弁する訳で、あらゆる人が高等教育を受けて社会の必要とするどんな職種にでも不平なく就くようなことになれば、いろいろの複雑な社会問題はあるにしても、こういう国があっても良いかも知れぬ。松下さんの言われるように、どの国でも国民的自覚、国家意識の高揚に留意してない国はないが、義務教育の間に魂をつくっておくべきだと強調されている。二十代にもなれば、損得を先に考えるから「三つ子の魂百まで」といわれるように、この幼少年期にミッチリ人格形成の基礎を作っておくべきだ。私共の学生時代、青柳先生は道を外した者は知識ある悪魔といわれた。知恵者は無知の者より知恵を働かせて、遙かに大きな害毒を流すことになる。終戦直後、多くの学生諸君が復員して来た。長い間知的飢えを感じていた青年学徒の読書や研究に対する意欲は旺盛であった。学問に対する魅力・面白さにつかれたように、書物を求めんとして書店の前に、延々列をなしていた風景に私は心打られたものである。

でも、かつて国民精神復興に関する詔勅が下されたことがあったし、また何か天変地異があれば、例えば大正十二年の関東大震災の時などにも、天譴だとか、天の誠めなどといわれたことがあった。お互いに自省自戒して、じつくりと、落ちついて、ギリシャの格言「Festina Lente」ゆっくりと急ぎたいものだ。

石庭で有名な洛西竜安寺に「知足」(吾唯知足)のつくばいがある。所謂、分を知って、分に應じて暮しをせよとの処世上の教訓であるが、かつて国民精神復興に関する詔勅が下されたことがあったし、また何か天変地異があれば、例えば大正十二年の関東大震災の時などにも、天譴だとか、天の誠めなどといわれたことがあった。お互いに自省自戒して、じつくりと、落ちついて、ギリシャの格言「Festina Lente」ゆっくりと急ぎたいものだ。

頼山陽追慕

日本建鉄働会長
大正十五年卒

石川辰雄

あるが、一面からいって、現状に満足せず、分を超えた大望を懐き、大いに奮奮して将来大いに伸びようと心掛けることは大切である。大いに努力しベストを尽してあとは、絶対者にお任せする心境が望ましいし、また学問研究には際限がなく、更に上へ上へと研究を深めて行く、飽くなき努力を重ねて行くことによって、学問は進歩して行く。この意味では、知足は一寸あてはまらぬ。取り止めもなき新春雑感、多謝。

(昭和五十年一月十五日)

刻選んだ新鮮な佳肴を始めとした山海の珍味が卓に充ちた。肩のこらない文人墨客の逸話などで談論風発。やがて酒にうるんだ酔眼には、竜宮城もかくやとの夢心地。但し乙姫様がいないので、浦島太郎ばかりで梁山泊まがいの騒々しさ。

宴たけなわの際ふと船上から陸地の方向に目を移すと、香港島の山々が眉を圧して迫っており、月こそ無けれ海岸に並んだネオンサインの色とりどりの輝きは千波万波に美しく映じていて、その間に浮ぶ舟の櫓は波にゆれて上下している。さながら舟が静止している、光彩の方が高低しているような、えもいわれぬ美しい情景を呈していた。

万橋影裡 月高低
醒め来って忽ち覚ゆ、
身、客となれるを
隔水の青山、これ香江
これを見た主人公を初めとした華僑の面々はすっかり興に乗って、さらば我々も次々と即席の詩を披露し合った。ご主人公の歓迎の詩は次の通りであった。

東閣喜筵開 佳客欣自來
四海皆兄弟 杯酒共暢懷
かくてこの夜は興の尽くる所を知らず、墨客交歓の宴もかくやとばかり、夜更ぐるのも忘れて過したのであった。

翌日前後のご主人公に連れられて、その上のボスである喜寿を越えたと見える上品な老華僑に面晤した際、談たまたま前夜の清宴に及んだ。老ボスは数ある詩の中から「緑酒紅灯」の一つを指さして、いたく感動を示された。そして忽ち胸襟を開いてくれて、愛蔵の書画骨董から古文書まで次々と興から持って来て披露あり、更にこれらと同等の貴重な残り半分は上海の方に秘蔵してあるとあって話は尽きず、いつまでも離してくれないのは困惑するほどであった。

この談中といわく、私(老ボス)は今迄随分沢山の日本人の詩に接したが、どこかに日本人の作らしいつたなさを感じたものである。

某年某月、香港島における偶話である。九竜側から香港島に渡って一と山越した、むこう側の海浜に入江があり、船着場の町があった。その少し沖あいに、フローテイングレストラント「太白」という、中国料理店が浮んでいた。私も若干名は、華僑の人たちに招待されて、岸からの小舟でその親船に案内された。

船につくと、舷側に大きな生け簀が幾つも並んでいて、その中に大小さまざまな各種の魚類や甲殻類が、それぞれの区分の中で元氣

に遊ぶしている。その中から嗜好に応じて指示すると、タマ網ですくいあげて、それが今夜の膳羞に供されるといふ仕組みである。一としきり新鮮な海の幸の生態に興じてから、食卓へと歩を移した。

食堂は豪華な中国風で、「金銀の珠をつらねて敷たえの、いおえの錦や瑠璃のとほそ、しやこの行きけた瑪瑙のはし」(鶴亀の一句)とまでは行かないが、気楽な遊子には十二分のエキゾチックな雰囲気を与えてくれた。

やがて開宴ともなれば、緑や紅の美酒が夜光の玉杯に盛られ、先

そのそもここに来た時から、太白(さかづき)という屋号を見て、頼山陽が「太白舟にあたって月よりもあきらかなり」と詠じた、かの有名な「雲か山か貝か越か」の詩趣を思い浮べて、旅情をそそられていたのである。その先入観もあったのか、美酒に陶然となった私は茶目気たっぷり、「唯今私はこのような感懐を催した」といって、筆を所望して次の一詩をサラサラと書き示した(勿論七言絶句の漢詩体で)。

緑酒紅灯 醉眼迷う

しかるにこの詩は中国人の作だといつても、誰も疑わぬほどよくこなれている、実に見事である、と激賞された。

さてこの話にはオチがある。私はこの詩を一言も私の作だとはいつてない。酔余の座興で「私はこのような感懐をもよした」といっただけである。

というのは、この詩の原作者は、頼山陽先生なのである。山陽先生が下関のうみべで扁舟

日華交流教育会議に出席して

法政大学教授
昭和四年卒

安達 遂

まえがき
日華交流教育会議主催の第二回教育研究会が四十九年八月二十・二十一日の両日東京で開催されたが、請われて「日本の工業教育の概況」と題して講演をした。日工協の事務局からたくさん資料をお借りしたので、会議の模様や台湾の工業教育の概況を本紙上で報告したい。

(1) 工華交流会議の成立経緯 中華民国台湾省は周知のように、アジア地域屈指の産業文化の発展国で、わが国とは歴史的地理的に深い近隣関係にあり、かつ両国間の貿易量も大きい友好親

に身を托して、明月のもとで痛飲された際、門司の山々を眺めながら賦されたものである。従って「隔水の青山」のあとは「これ鎮西」となっている。私はこの二字を「これ香江」と即興でもじっただけである。

それにしても中国の老練人をして、中国人の作に寸分たがわぬ名詩と感嘆せしめた、頼山陽先生はえらいものだあと、改めて追慕の念を深くした次第であった。

善国であったが、国家間の外交関係は一昨年の日中協定以来、残念ながら断絶している。しかし両国民間の親密感強固で、文化経済の交流面においてもますます緊密度を深めている。

日華交流教育会議はかかる友好的ふんい気の中で一昨年秋季結成されたが、その目的として、
①政府間の関係如何にかかわらず両国の教育団体・研究団体が連繫し、②純粋な教育研究の交流を通じ両国間の教育研究者の理解と友誼を深め、③健全な若い世代の効果的育成に務め、広く世界の平和と繁栄に寄与する

と規定している。
日本側代表者は桑原寿二氏（総合研究所長代理・中国部部長）で、台湾側は許国雄氏（台湾省教育会理事長）となっている。
第一回教育研究会は、一九七二年十二月二十七・二十八日の両日台北市で開催された。わが国から四十五人の団員が参加したが、両国とも小中高校・大学の教員が主で、活発な交換発表が行われた。

工業教育座談会は、一九七三年十二月、わが国の工業教育考察団（二十三名で構成）の訪華で台北と高雄の両市において開催された。
(2) 第二回教育委員会 去る八月二十・二十一日の両日、緑濃い神城にある明治神宮会館で、中華民国の教師代表団五十数名を迎えて開催された。全体会議の前、八個の分科会に分れて熱心な交換発表が行われたのがその区分は、①倫理道德、②国語国文、③社会科、④理科、⑤経済と科学技術、⑥芸術、⑦特殊、⑧医学と保健体育であった。
私の講演は第五分科会で、次の内容項目にしたがって発表した。①工業教育の概観、②工業教育の制度、③工業教育における

る問題点（八題目）、④産学協同（五題目）、⑤日本工業教育協会、⑥海外における工業教育の展望
台湾側の講演は国立台湾大学教授金租年氏によって「台湾の工業教育と生産・建設人員の需要」と題して行われた。
(3) 台湾の工業教育とその概況
前節の金教授の講演内容と他の統計資料によってまとめたものを紹介したい。
(a) 教育制度
教育期間の長短により、工業系学校の区分が行われているが、本年度における学校数・学生数などを別表で示す。大学や専科学校は国公立が大部分で、少数の私立学校（財閥経営のものが多い）がある。
(b) 技術者・技工の需給関係

別表 工業教育制度一覽表

学校種別	項目	教育期間(年)	入学資格	学級数	学生数	備考
大学・独立学院		4	高級中学卒業	23	18,000	1974年度卒業予定数 5,600人
博士課程併置大学		—	—	6	—	
2年制専科学校		2	高級中学卒業	15	約50,000	1974年度卒業予定数 15,470人
3年制	〃	3	〃	1		
5年制	〃	5	国民中学卒業	25	約100,000	同上 29,600人
高級工業職業学校		3	〃	140		
初級	〃	3	国民小学卒業	—	—	国民教育が9年に延長されたため現在入学予定数1974年度卒業予定数4,000人
技工訓練所		3月~1年	〃	—	—	

各種の学校や訓練所の在校生数と一九七四年度卒業予定数は別表の通りであるが、近年工業や国際貿易が急速に発展したため、技術者や技工の需要が大幅に増加し、供給がこれに伴わない状況で、平均

約三五%の不足と説明され、特に建設・工程管理・機械工業・電気工業関係の著しい技工不足が述べられた。

あとがき

随筆

中電工業(株)社長
昭和八年卒

潮見公安

一、クリスマス

私達家族は昭和二十三年四月の御復活祭の日に、松江で洗礼を受けたのですが、その年の十二月のクリスマスは大変印象深いものでした。当時は深夜ミサで午前零時に式が始まるのです。

周囲は全くの闇で、物音一つ聞えない静けさの中を、開式とともに壮厳なミサ音楽が始まり、沢山のローソクに点灯されますので、全く別世界にきたような身の引締まる思いでした。

当夜はまた、大変な大雪で月に照らされた白銀一色の風景も終生忘れ得ないものです。

世の中が次第に平和で豊かになるに従って、誰も彼もがクリスマスイブの酒に酔い、街全体が騒々しくなったことを、私は大変苦々しく思ったものです。

しかし、最近はいソフレ下の不

台湾における工業の発展・工業教育の向上・一般人の親日感情などを会議に出て充分に察知できたので、両国民の親善協力関係を一層緊密化したいと痛感した。

昭和十八年五月卒

況の中にあつて、クリスマスケーキも多量に売れ残った由です。

今後は、質素で落ち着いた家庭中心のクリスマスであつて欲しいと思います。

二、石の心

石は黙つてもものを云う(堀口大)

石に心ありや、ありと云えばあり、なしと云えばない。

私が石の心に接するようになって、もう二十数年にもなります。

私は人工を加えない、自然のままの石が好きです。そして、その土地特有の形と色をしたものが好きです。

私は旅行すると、必ずその土地の小石を持ち帰ります。もう何十箇と集りましたが、その一つ一つにその土地の、その時の想い出があります。

私は一九六八年八月モスクワで

開かれた世界動力会議に出席しましたが、その折、黒海の保養地ソチで一日を楽しまました。ソヴィエトの若い男女がビキニスタイルで喜々としている姿を今でもハッキリ想い浮べます。その海岸で拾ったのが、黒に真白の縞模様のある実に見事な小石です。

それからスウェーデン、英国、

仏国を経てスイスに行き、郊外にある超高压変電所「ブライト」を見学した時のこと、構内に敷きつめられたガラスの中から、アルプ

マリの思い出

島津製作所常務取締役
昭和十年卒

中堀孝志



が家をわがもの顔に振舞つて家族と生活を共にした。このマリについての忘れられない思い出のいくつかを綴ってみましたと思う。

はじめのうち、マリは私の掛けぶとんの上でまるくなって寝ていたが、いつの間にかぶとんの中にもぐりこんで、まるで赤ん坊のように私の胸のあたりを、ねまきの上から吸いながら寝るようになった。

硝子戸の一部を改造したマリ用の出入口から、マリは夜中によく出て行った。多分用を足しに行っ

スの小石と思われるものを拾うのに一生懸命でした。そんな私を見て「あなたがそんなに小石が好きなのなら、私の小石を差上げます。と案内の人が下さったのが、今まで見たこともない美しいウグイス色の石で、その中の無数の色彩がこれまた絵に画いたような美しさなのです。

私は今でも、この小石をみては

当時の事を懐しく思い出しています。

たのだろが、ときどきねずみをつかまえてきて、枕許でこれを弄ぶのには閉口した。ねぼけまなこでまず大はしやぎのマリをとり押え、つぎに弱っているねずみを始末することは、さすが猫好きの私にとつても、うらめしい限りであった。

ある時、夜中に戸外から帰ってきたマリは、どう間違えたのか、その日拙宅に泊っていた叔父の寝床にもぐり込むつもりで、叔父の鼻のあたりをべろりとなめたらし

叔父の叫び声でびくくりして目を覚ましたらその始末、おかしいやら気の毒やらとにかくさんさん謝つてマリを引取った。

マリはよく子を産んだ。いつも二階の私の書斎の机の下に置いたダンボール箱の中でお産をした。それはたまたまある日曜日のことであつた。その頃マリのお腹がかなり大きくなっていたので、例によつて二階の机の下にお産の用意をしておいたのであるが、階下で用事をしていた私のズボンの裾をマリがしきりにくわえて引張るのである。どうやら二階に来てくれというこらししい。それでマリ

について二階にあがってゆくと、マリは箱の中に入って私を見上げながらウォー、ウォーと苦しそうな声で唸りだした。

さてはしんどいのでお産の間、私に見ておつてくれということかと、傍に坐つて腹をさすつてやりながら、マリの様子を見ていたがなかなか生れない。

一方、階下の用件が気になるので、マリが目をつぶっている隙にこっそりと下に降りて行つたとこゝろ、マリは私のすぐあとについて降りてきた。そしてまたズボンの裾をくわえてひっぱり離さない。とうとうお産が終るまでおつき合いをしたが、この時まるで自分の娘に對するようないとおしさをマリに感じたことであつた。

マリの子は知合の人々に随分無理をいつて貰つていただいたが、富永清さん(昭十三卒)もその被害者の一人である。しかし、富永さんの奥さんは、マリの子は大変賢しくつてよい猫であつたと、のちのちまで私の家内にはめて下さつたし、またその猫はご家族の皆様から大層可愛がっていただいたことも承知しているの、被害者というのには当らないかも知れぬ。

そのうちマリの子が友人知己のところへゆきわたるにつれて、その処置に困るようになり、ひとこゝろは八匹の猫が家の中を横行していたこともあつた。

マリは私が出張で数日留守をしている間に死んだ。近所の犬に噛まれ、空地にあつた松の木にかけ

のぼつた後、力尽きて地上に落ち息絶えたとのことであつた。

マリのなきがらは涙ながら家族一同で庭の一隅に葬つたが、その後わが家に残つたマリの娘モモ(鼻先がきれいな桃色であつたので長女がモモと命名した)も同じ運命をたどつた。

ある日私が会社から帰宅したところ家の者が大騒ぎをしていたが、モモが例の犬に噛まれて、マリと同じ松の木にかけあがつて震えているところであつた。

私の呼ぶ声に、モモはよろめきながら松の幹をずり降りて、私の腕の中に抱かれた。いそいで猫のお医者について行つたが、そこで手当を受けている間に死んだ。

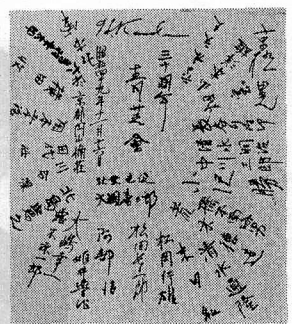
それ以来、私は猫を飼うことをやめて今日に至つてゐる。先年近所の写真屋さんから五匹の可愛い小猫をうつした美しいポスターを買つたが、これを眺めては在りし日のマリとその子供達とを懐しく思い出している今日この頃である。

昭十九年度卒

青芝会開催

去る十一月十六日、卒業後三十周年に当り、円山公園の近傍にある楠荘において、阿部・松田両先生の御出席をいただき青芝会を開催した。両先生の訓話「エネル

ギー危機に直面した日本の将来に最も必要なものは技術開発であ



る。」と激励され、柔軟性の回復を痛感したような次第です。閉宴後、学生時代の回想、好不景気問題、国際化など深更まで京都情緒を味わいながら語り明かした一夜でした。(幹事記)

計報

昭12卒	黒川	武夫	49・10・18
大10卒	岩本	勝弥	49・11・26
大12卒	大串	長成	49・11・5
大12卒	庄野	誠一	
昭2卒	松野	保登	
昭2卒	本間	昶	49・12
講大9	佐伯	仁助	
昭11卒	岩崎	兼幸	49・2
講大9	沢屋	菊松	49・12・3
明41卒	宝来勇四郎		48・2・6
明44卒	中島	謙一	47・7・26
昭14卒	伴	正男	49・10・13
大7卒	工藤	寿男	50・1・2
講大8	田中	百藏	46・4
講大8	上野亀次郎		46・1
講昭2	島	七之助	47

編集後記

大15卒 山本 三郎 50・1
昭8卒 棚橋 竜之 49・7・30
以上の方々御逝去になりました。謹んで御くやみ申し上げます。

○本号には昨年秋亡くなられた岡本先生の追悼記を林千博教授に書いて頂きました。丁度執筆を依頼中に元東京支部長山本三郎氏の御急逝の報を新聞紙上で知り、全く寝耳に水の感にて驚きと共に哀悼に堪えません。山本さんには洛友会のことと非常に御世話になり、私が故山村忠行氏の後任幹事として、林重憲先生より御紹介頂き仕事をすゝめになった当初より御親切に色々指導を下さり、その御誠実なる御風ぼうが限に浮ぶ様です。同氏の追悼記事を同窓の石川辰雄氏に御執筆願いました。○松田先生には何時もの様に新春雑感を御願いしました。又洛友会の大先輩であられる高柳与四郎氏は、九州支部の総会には必ず御元氣な姿を御見せになり、御出席賜わるるのでその御健康法の一つと察せられる謡曲の御話を御寄稿頂きました。○会員の住所変更、勤務先の異動が多いので、その後の異動を正誤表と共に別紙に掲載しました。

2月特集号 昭和49年における 電力技術革新のあゆみ 定価 400円 送料 28円

(研究所・海外主要国編)

技術開発激化の年と言われている折から、本号は電子技術総合研究所、電力中央研究所、超高压電力研究所の各部門におけるこの一年間の技術革新の成果について執筆されたもの。電力技術の最も新しい決定版。関係各部門の方々には、日常業務面での最適の好伴侶。ぜひお手許に！ (残部僅少・至急御申込を)

株式会社 電気評論社 本社 京都市左京区田中大堰町49 千606 電話 京都 (075) 701-2582

○昨秋、洛友会有志の方々への御協賛を得て発行しました鳥養利三郎先生随筆集は、お蔭様にて好評を博し、多くの方々より御礼の手紙や葉書を頂きました。本随筆集は、多少余部がございますので御希望の方は一部参千円にて御分けしますの御申越下さい。(幹事山本記)